

## デイヴィッド・アーミテイジ、ジョー・グルディ「「野心的な歴史学」のために——批判への応答」

David Armitage and Jo Guldi, “For an “Ambitious History” A Reply to Our Critics”, *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 70-2, 2015, pp. 293-303.

### 紹介

2015 年のアナル誌では、デイヴィッド・アーミテイジとジョー・グルディを火付け役とする「長期持続」論争の特集号が生まれ、五人の歴史家が批判的に応答した。今回紹介する論文は、そうした批判を受けたうえでのアーミテイジとグルディによる再応答である。

### ○導入部

- ・「長期持続」(*longue durée*)は、歴史学の導きとなる語として 1958 年のアナル誌でフェルナン・ブローデルによって紹介された。歴史家は、人間科学を取り巻く競争の中で自らの地位が安泰ではないことを自覚しており、発言権と地位を求めて戦わなければならなかった。人間科学全般の危機が広がる中で、ブローデルは「長期持続」によって歴史学が相互に対立する人間諸科学を統合できると考えていた。
- ・著者たちの目的はブローデルの目的と似ている。つまり、危機を診断し、それに取り組むための道具を発見し、急激に変化する状況において歴史家の使命を提示することである。ブローデルの論文と同じように、著者たちの論文<sup>1</sup>は何よりもまず「議論への呼びかけ」であった。意図的に簡潔かついくぶん論争的に書いた論文ではあったが、すでに出版前から喚起されていた反響を見ると、歴史学の危機の原因とその潜在的な解決策がさらなる研究に値するという確信がわいた。さまざまな例やケーススタディを交えた詳しい説明が知りたい読者は、『歴史学のマニフェスト』を参照してほしい<sup>2</sup>。
- ・著者たちは幸運にも五つの応答を得ることができた。リン・ハント、クリスチャン・ラムール、クレール・ルメルシエ、クラウディア・モアッティ、フランチェスカ・トリヴェッラートは、論文の中で提起した問いを真剣に受け止め、批判的な分析と建設的な応答をしてくれた。

---

<sup>1</sup> David Armitage and Jo Guldi, “The Return of the *Longue Durée*: An Anglo-American Perspective”, *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 70-2, 2015, pp. 219-247.

<sup>2</sup> Jo Guldi and David Armitage, *The History Manifesto*, Cambridge: Cambridge University Press, 2014), <http://historymanifesto.cambridge.org> [デイヴィッド・アーミテイジ、ジョー・グルディ (平田雅博・細川道久訳) 『これが歴史だ!——21 世紀の歴史学宣言』 刀水書房、2017 年)。

- ・「長期持続の回帰」(return of the *longue durée*)という説明は、時間については広く捉えているものの、空間については意図的に控えめにしている。『歴史学のマニフェスト』で主張したように、近年の歴史家がさまざまなトランスナショナル・ヒストリーを追求しているのと同じ仕方で、より広い形のトランステンポラル・ヒストリーを実験する時期に来ているのかもしれない。
- ・論文の焦点を絞るために、著者たちは意識的に自分たちがもっともよく知っているアカデミックな環境についてのみ書くことにした。しかし、世界の他の地域についての(あるいは他の地域にいる)歴史家たちから、比較を試みる応答が出てくるのを望んでいた。

### ○ラムールへの応答

- ・この期待に応えてくれたのは、著名な中国史家で宋代(960-1279)を研究しているクリスチャン・ラムールーの考察であった<sup>3</sup>。ラムールーが著者たちの試みを「疑いなく大歓迎である」とし、中国学者としての立場から「(著者たちの)視野を広げる」ことで補足したいと考えてくれたことは喜ばしいことであった。
- ・ブローデルやアナル学派が中国研究を強く支持していたことはあまり知られていない。ラムールーが指摘しているように、これはブローデルが「文明」の歴史的再構築に関心を持っていたことと関係している。ブローデルにとっての「文明」とは、「長期持続」によって研究しなければならない人類の文化の複合体であった。
- ・ラムールーは、「文明」という概念が今日では一般的に信用されていないことを正しく認識している。なぜなら、「長期持続」の重要性は場所によって異なるため、異文化の比較をおこなうことは誤解を招きやすく危険だからである。
- ・著者たちが「長期持続」を意図したのは、人間の寿命に近い短いタイムスケールに限定された歴史研究に批判的な視点を与えるためであった。それによって、二千年近くにわたって西洋の歴史記述を形づくり、20世紀前半とその半ばに特に強く主張された、未来志向の衝動のいくらかでも取り戻すことができると考えられた。
- ・しかし、ラムールーが示唆しているように、「長期持続」による改革の可能性は、中国史における「抑圧的で麻痺した」より保守的な「長期持続」概念の使用と緊張関係にある。こうした場合には、中国が歴史を持たない停滞した文明であるという考え方を覆すために、「長期持続」を「再構築」するよりも「脱構築」することが必要かもしれない。
- ・タイムスケールの選択は、歴史家が解決しようとしている問題だけに依存するのではない。地域によって異なる歴史学の伝統に照らし合わせてつねに調整される必要がある。

---

<sup>3</sup> Christian Lamouroux, “Chronological Depths and the *Longue Durée*”, *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 70-2, 2015, pp. 285–91.

### ○ルメルシエへの応答

- ・異なるタイムスケール（長期と短期）と対話することは、クレール・ルメルシエが「白黒のトーン」〔つまり、長期か短期かという単純な二元論〕<sup>4</sup>と呼ぶものを避けるための一つの方法である。
- ・著者たちの関心の中心にあるのは、歴史学が人間諸科学と公共の場において本来の地位を取り戻すにはどうすればよいかという問いである。歴史家のために書くだけではこれは実現できない。アカデミズムの枠を超えて一般の人びとにアプローチするための重要な方法として（唯一の方法ではないが）オープンアクセス出版を推奨するルメルシエの主張を、これ以上ないほど強く支持する。著者たちが『歴史学のマニフェスト』をオープンアクセス化し、無料でダウンロードできるようにしたかったのはまさにこのためであった。
- ・同じように重要なのは、詳細な研究成果を、より広い議論、より広いタイムスケール、さらには公共政策の問題との関連で明確に示す必要があるということである。この点において、著者たちはブローデルを誤解したのではなく、彼の「長期持続」の概念を別の目的のために使ったのである。
- ・大規模なコーパスをデジタル分析にかけることには利点がある。とはいえ、遠読<sup>5</sup>が歴史家のナイーブさや怠惰さを助長するのではないかというルメルシエの懸念は正しい。繰り返しになるが、著者たちが目指したのは歴史学の方法の批判的使用を勧めることであって、それは問いを投げかけ、そうした問いに答えようと探求し、その結果に関しては慎重であり続けるということである。1960年代の量的歴史学(quantitative history)の第一波の教訓はすでに学ばれている<sup>6</sup>。その時の明らかな失敗が、歴史家を「壁に囲まれた庭」に引き戻すようなことがあってはならないのである。
- ・デジタルの方法は文献学の新たな形態と考えることができる。しかし、デジタルの方法を用いることとカテゴリーの歴史性に無関心であることとのあいだには何ら必然的なつながりはない。現在、私たちが自由に使える一連のツールを用いたデジタル分析は、歴史学のあらゆる方法と同様に細心の注意を払って取り扱われるべき技術である。
- ・「異なる時間性と視野」を行き来することはつねに不可欠である（「長期持続」と「短期持続」、「クローズ・アップ」と「ワイドアングル・ショット」）。著者たちはそれ以外のことを提案したのではないが、歴史家の同僚たちにこの対話と統合の必要性を思い出

---

<sup>4</sup> □ 内はレビュー担当者の補足。

<sup>5</sup> 〔著者の念頭にあるのはモレッティの議論であろう。フランコ・モレッティ（秋草俊一郎ほか訳）『遠読 — 「世界文学システム」への挑戦』みすず書房、2016年〕。

<sup>6</sup> Claire Lemerrier and Claire Zalc, “Le sens de la mesure: nouveaux usages de la quantification,” in *À quoi pensent les historiens? Faire de l'histoire au XXI e siècle*, ed. Christophe Granger, Paris: Autrement, 2013, pp. 135–48.

させるために、ある種の論争の力に訴えることにしたのである。多くの歴史家は、おそらく「彼らの好みが本能的に短期的なものに向かっている」ためなのか、歴史研究に不可欠な時間性の一つである「長期持続」を忘れてしまっているようだ。

### ○トリヴェッラートへの応答

- ・フランチェスカ・トリヴェッラートによるバランスのとれた応答の主な関心は、「長期持続」の「意義と価値」についてである<sup>7</sup>。リン・ハントと同様に、トリヴェッラートも人文科学の「危機」の存在を認めている。このことは、著者たちの論文や『歴史学のマニフェスト』の背後にある緊急性が見当違いではなかったことを裏付けている。この危機は多方面に及んでおり、公共政策の領域から歴史家が消えてしまったことや、〔歴史学の〕教室から学生がいなくなってしまったことなども含んでいる。
- ・トリヴェッラートは、西洋の優位やいわゆる「文明の衝突」を喧伝するようなある種の「長期持続」の物語が、不幸にも多くの人びとの共感を得ていることを指摘している。これらは、『歴史学のマニフェスト』において「不純な長期持続」と呼んだものの例である。トリヴェッラートは、このような誤ったマスター・ナラティブを打破する方法として短期の研究を強く主張している。
- ・トリヴェッラートが挙げている短期の歴史研究の例に異論を唱えることは難しいだろうが、それでもなお、著者たちが「長期持続」の歴史において重要だと考える二つの特徴を再確認したい。このような研究は、より焦点を絞った歴史研究に代わるものではないが、そうした研究を常に充実させることができる。
  - ①一つ目は、長期の歴史学が特定の時代やエピソードのより大きな空間的、時間的、社会的コンテクストを説明し、コンテクスト化することによって、学者と専門家ではない読者とをレトリック的に橋渡しすることである。
  - ②二つ目は、長期の歴史学が、連続性と不連続性、さらに私たちの時代にまで堆積した複数の過去へのアクセスを開くことによって、過去と現在とを橋渡しすることである。
- ・著者たちの提言は、未来を見据えつつ、「短期持続」と「長期持続」の融合、そして過去と現在の対話を訴えている。
- ・「長期持続」の「意義と価値」は、歴史家としての私たちの研究の基礎となる道徳的なコミットメントにある。19世紀から20世紀にかけての半科学的な(semi-scientific)学問としての歴史学の発展は、しばしば歴史家の義務が過去だけにあることを強調し、現在主義が職業的歴史家の犯しうる最大の罪の一つと見なされることになった。このこと

---

<sup>7</sup> Francesca Trivellato, “A New Battle for History in the Twenty-First Century?”, *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 70-2, 2015, pp. 261–70. 歴史学文献レビュー⑮を参照。

もまた、歴史家を未来への義務から切り離す結果になったのである。

- ・こうした歴史学の展開の意図しない結果を覆すために、著者たちはトリヴェッラートの、「長期持続」を他の時間概念と「共存」させるという訴えを支持し、歴史家たちに、過去、現在、そして未来への重層的な関わりを思い起こすように促す。歴史家は自らの研究が学問の世界の内外でどのような価値があるのか、また、気候変動、経済不安、資源危機などによって曇らされた未来に対して、歴史学がどのような助けとなるのかを問わなければならない。
- ・こうした問題をめぐる議論に歴史学をどのように用いるかは依然として難問ではある<sup>8</sup>。トリヴェッラートは、歴史学の「方法論的多元主義」が祝福であると同時に呪いであり、「歴史記述の危機と活力の両方の核心」であると鋭く指摘している。この多様性が、歴史家の影響力を経済学者に譲り渡した理由の一つかもしれない。
- ・歴史家が浪費を好むのに対し、経済学者は儉約を好み、歴史家が複雑さを与えるのに対し、経済学者は〔政策〕決定者が切望する明快さを与えることができる。職業的歴史家を創造的にしているものが、その危機の原因になっているかもしれないという認識は、励みになると同時に落胆させるものでもある。
- ・励みになるのは、歴史学の継続的な活力と、歴史学の道具化に対する予防が示されているからである。落胆させるのは、著者たちが「社会の未来としての過去」(the public future of the past)と呼ぶものに対する不安〔未来のために歴史を役立てるという考え方への不安〕が高まっていることを予感させるからである。短期主義(short-termism)がルールとなった世界で、歴史学と歴史家はどのような役割を果たすことができるのだろうか。

### ○モアッティへの応答

- ・「なにもない」というのがこの問いに対するクラウディア・モアッティの答えだろう<sup>9</sup>。「長期持続」の歴史家が「役に立つ研究をすることが求められているのは、よりよく教えるため、諸機関の求めに応えるため、あるいは社会を改革するためである」と彼女は述べているが、それは歴史家が未来を形作る、あるいは歴史家が公共の議論で何らかの役割を果たすという考え方そのものをただあざけるためである。
- ・モアッティは、歴史家が政治機関に取り込まれないように警告している点では正しいが、そうした危険はなにも「長期持続」の歴史家に限ったことではない。
- ・また、彼女が「大衆化と研究」を区別しているのも正しく、自分の知識をより多くの市民が理解できるような言葉に変えようとする歴史家の努力は、学問によって支えられ

---

<sup>8</sup> Virginia Berridge, “History Matters? History’s Role in Health Policy Making”, *Medical History* 52-3, 2008, pp. 311–26. はこの問題についての有益な議論である。

<sup>9</sup> Claudia Moatti, “E-Story, or the New Hollywood Myth”, *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 70-2, 2015, pp. 255–60.

るべきである。だが、意識的にせよそうでないにせよ、現在の問題意識が研究課題を形づくるのを防ぐことはできない。著者たちは、歴史学が権力の手先でも単なる娯楽でもなく、批判的な人間科学である点でブローデルに倣っているのである。

- ・モアッティは著者たちの議論をハリウッドと皮肉っぽく比較しているが、そうした比較は歴史研究の動機が好奇心以外にはなにもないと言っているようなもので、見当違いである。芸術のための芸術(art for art's sake)というのは、妙に後ろ向きな正当化の仕方であり、現在の人文科学の危機の只中にいる歴史家としては、現実認識を欠いた危険な自己満足でしかない。
- ・モアッティは、「長期持続」の回帰を支持する著者たちの議論が規定的(prescriptive)であり、規範的(normative)でさえあると考えている。彼女は、著者たちが提示した豊富な引用には思慮がなく、説得力がないと言っているが、そうした引用の目的は「長期持続」がすでに復活しつつあり、さまざまな分野の歴史家(思想史、宗教史、環境史、経済史、その他多くの分野)が、長期のタイムスケールの中で、すでに新しい問いを投げかけ、批判的な物語を生み出していることを示すためであった。
- ・したがって、そうした引用の目的は記述的なものである。つまり、いまだ未踏の地に足を踏み入れることを仲間の歴史家に勧めているのではなく、先駆者たちがすでに切り開いた道に沿って、ブローデルの「野心的な歴史」を他の歴史家(特に若い研究者)が追求するように促すことが目的だったのである。
- ・モアッティが何に反対しているのかはあまりにも明白である。彼女は実証主義、科学主義、そしてポピュリズムの敵である。ラムールやルメルシエと違い、彼女は歴史家が使う史料の中に系列的なデータ〔統計分析が可能なデータ〕を位置づけることができない。彼女は、デジタルの方法に対しても懐疑的である。彼女は、歴史研究に関してアクセス可能性やリレヴァンスを示唆するいかなるものも軽蔑しているようだ。彼女が気に入らない議論や動向は自動的に「イデオロギー」として非難され、有無を言わさず排除される。彼女はまた、いかなる種類の「大きな考え方」にもアレルギーを持っている。
- ・では、モアッティは何を支持しているのか。それがあきらかではない。歴史家は、「批判的思考」(critical thinking)と好奇心を発揮し、「共時性」と「通時性」を融合し、控えめな謙虚さを身に着けて、公への関与や自己宣伝を控えるべきだと彼女は言う。しかし、こうした考え方は実践的な戦略でないばかりか、すこしも刺激的ではない。

## ○ハントへの応答

- ・リン・ハントの応答はモアッティよりも生産的なものである<sup>10</sup>。彼女は、歴史学がいま

---

<sup>10</sup> Lynn Hunt, "Does History Need a Reset?", *Annales. Histoire, Sciences Sociales*, English Edition, 70-2, 2015, pp. 249-54.

積極的な擁護を必要としており、その活力に対する不安が根深い原因により生じているという著者たちの感覚を共有している。

- ・ハントは（トリヴェットに続いて）、著者たちの視点を超えて、歴史学だけを見たのではわからない危機の要因に注目している。ハントが、歴史家（実際には他の分野の学者も含む）の終身雇用の減少、非常勤講師の増加、相対的な報酬の低下、そしてアメリカの高等教育全体における学生数の増加などを、深刻な圧力として指摘しているのは確かに正しく、著者たちと意見を異にしていない。
- ・もちろん、「マイクロストーリーも文化史もこのような構造的問題を引き起こしたわけではない」が、高等教育の民主化により、かつて排除されていた集団に関する研究が増加するにつれてさまざまな要因が重なり合うようになった。
- ・気候変動、加速する不平等、世界的な金融危機の時代に育った世代の学者たちは、すでに独自の研究課題を設定しており、そのいくつかはデジタルの方法と生産的な関係を築いている。環境や資本主義についての歴史といった分野が目覚ましい成長を遂げていることから、将来的にはこうした重大な関心への応答として、より広範な「長期持続」の歴史が数多く見られるようになるだろう。

## ○結論

- ・著者たちが主張する「長期持続」は、ブローデルの野心と多くのものを共有しているが、ブローデルの概念と同じではない。それは、「牢獄」でもなければ、終わりのない周期でもなく、不変の風景でもなければ、他の活動の静的な背景となるものでもない。それはダイナミックで、柔軟性があり、何よりも既成の物語や制度に対して批判的な姿勢をとる。「長期持続」の回帰は歴史学のさまざまな分野で見られ、人文科学が直面している複数の危機を前にしても退く気配はない。
- ・ハントが言うように、「歴史研究の目的、方法、倫理について議論を喚起することが正しかった」のであれば、著者たちの努力（そしてアナルの本特集号における著名な対話者たちの努力）には、価値があったと信じている。復活した「長期持続」だけでは、歴史学、ひいては人文科学がますます疎外され、信頼を失っていくのを救うことはできない。しかし、危機の鋭い観察者であったブローデルが理解していたように、手遅れになる前にこうした課題に対処するためのあらゆる努力がなされなければならない。